



「江戸」はどこからどこまでか？ —本所・深川の地域性—

れたひとこそ江戸っ子だ」という意見まであり

■自明ではない「江戸」

江戸はどこからどこまでか？「そんなこと、自明じゃないか」と仰る方もいるかもしれませんが、「江戸は江戸城がある場所だ」と。しかし、それに重ねて「江戸城を中心として、江戸はどこからどこまでか？」と問われれば、たちまち問題が簡単ではないことがわかります。

たとえば、浅草は江戸でしょうか？ 江戸時代に「あざ草（浅草）をうちこへゆけば、ほどもなく、むさし（武蔵）の江戸につきにけり」（『あづまめぐり』）という文章があります。「浅草を越えて江戸に入った」という意味ですから、ここでは「浅草は江戸ではない」という結論です。

また、本所・深川の側から江戸城方面に隅田川を渡ることも「江戸へ行く」と表現することがありました。ここで「本所・深川は江戸ではない」という結論です。町奉行の支配地域であったにも関わらず、とされる墨田区・江東区でも、かつてはこのような見解があったのです。

極端な意見になると「神田生まれは江戸っ子じゃない、日本橋と京橋の間の土地に生ま

ます（西山松之助『江戸っ子』吉川弘文館）。こうなると、玉ねぎの皮を全部むいて、その小さな芯を出し「これこそ江戸だ」と主張するようなものですから、江戸原理主義、といっても差し支えないでしょう。

江戸はどこからどこまでか？それは「よくわからない」としかいえません。江戸は、現在の「東京都」などという行政区画とは異なり、ぼんやりとしています。

■スプロールして発達した「江戸」

それでは、なぜ江戸の範囲が不明確なのでしょう。それは、江戸という都市がスプロールして発達してきた歴史をもっているからです。スプロールとは、都市域が外側に向けて無計画に広がることをさします。江戸城を中心にして漸進的に外側に向けて発達したからこそ、見方により範囲が異なるのです。

本所・深川が本格的に都市化する時期は、明暦の大火（二六五七年）以降です。それでも、江戸城と本所・深川の間には隅田川が流れ、外堀の代わりとして機能していましたから、江戸城下の地域（日本橋・京橋等）と本所・深川地域の両者は、江戸時代後期まで、異なった地域として意識されていました。



■「行楽地」「城外」としての本所・深川

本所・向島（現、墨田区）や深川（現、江東区）は、江戸の住民が息抜きをする場所が多く、豪商や武家も別荘を構えました。回向院や深川八幡宮などの宗教施設、百花園などの長閑な庭園が点在し、江戸の中心部からは別世界を呈していました。花火の打ち上げは城近くでは禁止で、幕府は町触によって時々布告しています。しかし、両国では花火の打ち上げが許されてきました。

戊辰戦争（一八六八～一八六九年）の時、江戸城の開城に際して下打ち合わせをした山岡鉄舟と西郷隆盛は、元幕臣を向島に移すという計画を立てていました（この計画は実現されませんでした）。これには、隅田川を含めた江戸城の外堀か

寛永時代（1624～1645年）の江戸。「浅草」「神田」「糺町」（麹町）「浅府」（麻布）「芝」が江戸の範囲であった。この頃、「牛嶋」（現、墨田区）・「深川」（現、江東区）は独立した村であった。
『武蔵一国之図』（埼玉県立図書館蔵）

ら元幕臣を追いつ出す、という意図があったのでしよう。

また、幕末において、外国の公使館を設置する際も、候補地として、①「麻布外れ」、②「深川」が案

にあがっています（『大日本古文书』幕末関係文书之十八、東京大学史料編纂所）。これもまた、江戸城の外堀の中に外国人を住まわせたい、という意図があったのでしよう。

赤穂浪士たちが本所の吉良上野介邸に討ち入った事件についても、吉良邸が江戸城からみて川の向こう側にあった、という要素は無視して考えられないでしょう。もし、吉良邸が城の近くにあれば、將軍に憚りがあり、討ち入りできなかったかもしれません。

東京は駅を降りるたびに独自の顔を見せてくれる都市です。江戸・東京は様々な地域を繋げながら発達した都市なのです。

（墨田区文化財調査員

高尾善希）

公園は歴史の宝箱

～東白鬚公園の周辺をめぐる～

墨田区の北端、隅田川に沿うようにして、都立東白鬚公園が南北に広がっています。この公園の近辺には、古くは平安時代まで遡ることができる歴史的資源がたくさんあることを、ご存知でしょうか。

この東白鬚公園を舞台にして、平成27年10月24日に、すみだ生涯学習ネットワーク主催で、クイズラリーを中心とした、「すみだタイムトラベル」公園は歴史の宝箱」を開催しました。

「すみだ生涯学習ネットワーク」は、墨田区内のNPO法人、事業者、学校、区と関係のある大卒等が情報交換や連絡協議をしながら協働し、区民の皆さまのさまざまな学習ニーズにお応えすることを目指して構築されました。平成27年度は、NPO法人すみだ学習ガーデン、一般社団法人墨田区観光協会、NPO法人東京学芸大こども未来研究所、NPO法人向島学会、よみうりカルチャー錦糸町、学校法人立志舎、NPO法人ワーカーズコープの7団体で構成されています。

さて、ここでは、このイベントで、NPO法人

向島学会からご提供いただいたクイズの題材について、いくつかご紹介いたします。

○梅若伝説

梅若伝説は、木母寺に伝わる哀話です。

今から千年以上前、平安時代のことで。京都で人さらいにさらわれた梅若丸は、東北に売り出されるため長い旅をつづけました。しかし、隅田川を渡ったところで、病気になるようになってしまいました。12歳だったそうです。かわいそうに思った村人は、お墓として塚を作り、柳を植えます。この梅若丸の塚が木母寺の起源になったと言われ、「木母寺」とは、梅の字をわけて名前が付けられたという説があります。梅若丸のお話は、能「謡曲隅田川」となり、全国に知られるようになりました。

木母寺は、かつて墨堤通り沿いの梅若公園付近にありましたが、防災団地を作るときに、現在の場所に引越しをしました。

○白鬚防災団地

木造の家が込み入っている墨田区では、まちの人たちを地震から守る必要があります。地震に強く、もしも地震があつたらば周りの人たちがそこに避難できるように、団地と公園が計画されました。東京都内では初めての本格的な防災団地です。

このため、この団地では、地震の時に発生する火事から公園に避難してきた人を守るため、頑丈な建物が壁になったり、水神門や梅若門などの門が閉まるようになっています。また、火事の炎を弱くするためのスプリンクラーや放水銃もつけられています。

もともとこの地域は墨堤通り(昔の堤防)より低い場所でしたが、団地を作ったとき、3m程度地面を埋め立てているため、海面より高い標高になっています。

○寺島なす

江戸時代初期、三代將軍徳川家光は隅田川周辺でよく鷹狩りを行いました。そのような関係からか、木母寺の近くに「隅田川御殿」が作られました。また、梅若堀の北側には「御前栽畑」という畑が作られ、江戸城で使われる野菜が栽培されました。朝一番に収穫され



た野菜は、舟で隅田川を下り、外堀や内堀を通り、江戸城に運ばれました。

畑の世話は、地元隅田川の農家がしていました。この畑で栽培されていた野菜の一つが「寺島なす」です。

寺島なすは、大正時代の関東大震災の頃まで、隅田町や寺島町でたくさん栽培されていましたが、震災後、住宅が増え、畑が無くなったため栽培されなくなりました。

しかし、平成21年に、第一寺島小創立130周年の記念事業として、三鷹の農家の協力を得て、栽培に成功し、寺島なすは、墨田区内での復活を遂げました。

このように、地域にはさまざまな歴史があります。皆さんも、地域の資源に目を向け、地元の歴史を訪ねてみてはいかがでしょうか。

(生涯学習課生涯学習担当)